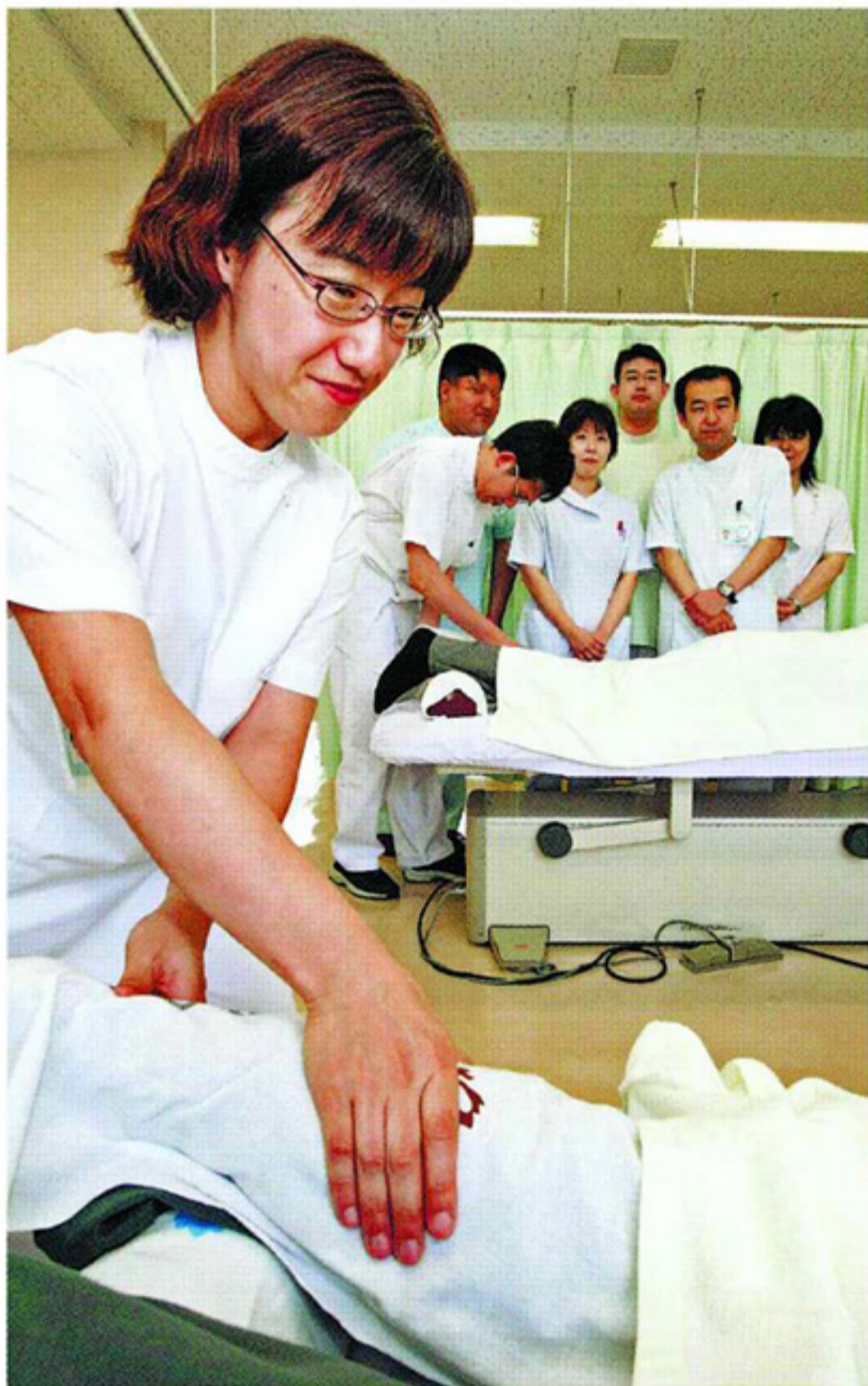


選手励まし支える

晩夏の道都を駆け回る大会を陰で支えるのが市民や企業のボランティア。制限時間の延長で参加者が大幅に増えた今年は、ボランティアも昨年より約2200人増え、約5200人に。熱く盛り上がる街中を走るランナーへの給水や、不慮の事故に備える救護スタッフ。完走を目指す選手を励まし、エールを送るボランティアたちを紹介する。

ボランティア総勢5200人



マッサージ

42・195キロを走り抜いた選手の体をマッサージし、筋肉疲労の緩和に一役買うのは北海道高等盲学校付属医療研修センターの職員や国家資格を持ったマッサージ師ら。今年は約20人が参加する。

疲れた筋肉癒やします

ゴール近くのテントで1人につき約15分、足腰をマッサージする。「ほてった筋肉を落ち着かせるのが大事」と話すのは同センターの驚頭弘康指導員。毎年約120人の利用があり、選手からは「つりそうだった足が楽になった」などと、感謝の言葉がかかるという。同センター職員の山田美奈さん(37)は「人それぞれ筋肉が違い、勉強になる。みなさんに喜んでもらえるのがうれしい」と心待ちにしている。

ゴール近くで選手のマッサージを担当する道高等盲学校付属医療研修センターの職員ら



完走後、体調を崩した選手の手当てをする救護班のスタッフ

2008年8月31日

救護班

夏のマラソンという過酷な条件下では、体調を崩す選手も出てくる。そうした不慮の事態にいち早く対処するのが医師、看護師、理学療法士らでつくる「救護班」だ。

不慮の事態素早く対応

参加者が昨年に比べ3千人増えた今年は、救護スタッフを大幅に増やし、学生やボランティアを含めると総勢約660人が選手をサポートする。救護テントは20、25、30、35、40キロ地点の5カ所に、スタートとゴールには救護本部を設置する。例年、最も多いのは脱水症状から熱中症になる選手で、テント内では点滴やアイシングをして回復につなげる。救護班の責任者を務める松田整形外科記念病院(札幌市北区)の菅原誠院長は、今年制限時間が1時間延長され、マラソンに不慣れたランナーも出場するだけに、体制で大会を迎える。

このほか、多くの団体が大会・選手を支えてくれている。協力団体は次の通り。(順不同)

- 【給水・スポンジ】▽札幌テニボン協会▽札幌市地域スポーツリーダー協会▽札幌市豊平区創造学園▽創造学園31塾▽札幌市家庭婦人ソフトボール協会▽札幌市立平岸小PTA▽同八条中PTA▽専門学校北海道体育大学▽東海大札幌キャンパス▽吉田学園情報ビ

- ジネス専門学校▽札幌山の手高ボランティア部▽新琴似三番第一町内会▽新琴似一番通町内会▽札幌市立新川西中▽札幌龍谷学園高▽道婦人スポーツ連盟▽札幌市立新陵中PTA▽有志の会▽札幌民謡連盟▽道家庭婦人バレーボール連盟▽道教厚別支部▽札幌市立旭小▽同新琴似南小PTA▽同前田北中PTA▽同新川小PTA▽真駒内駐屯地曹友会▽日本航空グループ▽東京海上日動火災保険▽手稲
- 鉄北連合町内会連絡協議会▽平岸地区町内会連合会▽前田連合町内会▽遠軽信金【沿道警備】▽北海道走友連合会▽札幌走ろう会▽北海道フルディックウォーキング協会▽南平岸まちづくりセンター▽豊平地区町内会連合会▽中の島地区町内会連合会▽平岸地区町内会連合会
- 【収容バス】NECフィールディング北海道支社

市民の応援後押し



ボーイスカウト

メダルと笑顔 完走祝う

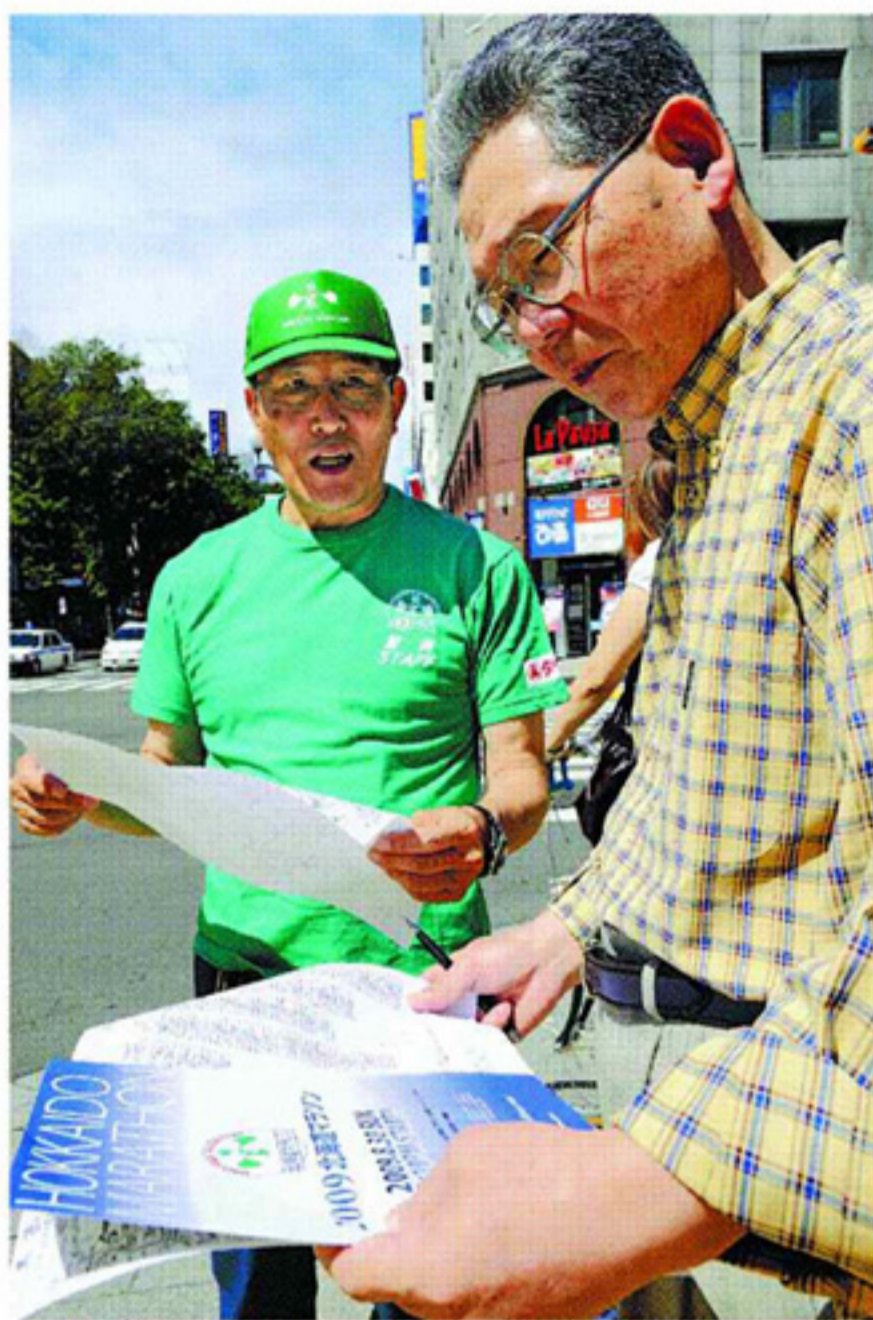
完走を目指す選手をゴールの大通公園で迎えるのは日本ボーイスカウト北海道連盟札幌地区のメンバーだ。小学生から高校生までの107人と指導者55人が参加する。

42・195キロを走りきった選手に「完走の証し」のメダルをかけるのは小学生の役割。愛らしい笑顔振りまいたため、毎年、選手からは「疲れが飛んだよ」と、ねぎらいの言葉がかかるという。

業務はほかに、アイシング、荷物受け渡しなどがある。大会当日、メンバーは朝から夕方まで作業し、終了後は大通公園の清掃活動までする。

中学時代から参加している中門亮介君(16)は「完走した人は尊敬します。手際よく仕事して、参加者が気持ちよく帰ってもらえれば」と話している。

▲完走した選手に笑顔でメダルをかけるボーイスカウトのメンバー20名
▲08年8月31日



地図を手に警備ボランティアの配置場所を確認する白沢さん(左)と歩くスキー協会のメンバー

沿道警備

観衆がコースに飛び出した。圧的にならずに「笑顔」で対応しないよう沿道警備に当たった。応ずること」。

「北海道歩くスキー協会」は、コースに進入して写真を撮る初回から参加しており、選手が、冷静さを忘れないよう心がけが支障なくゴールを目指がける。

冷静さを忘れずに

せるように、大会を支えてきた。今年には大幅に参加ランナーが増える。「警備も大変になるが、その分やりがいも大きい。5〜13・8キロの地点に3〜4人配置する。観衆にも楽しんで8分間隔で人を配置する。同らえるよう頑張りたい」と、協会理事の白沢一夫さん(63) 白沢さんは気を引き締めていによると警備のコツは、「威る」。

給水

スムーズに手渡し

選手に欠かせない給水にはコース周辺の町内会や学校、企業などが当たる。今年にはコースが一新されたため、給水・スポンジボランティア約2900人のうち半数は初参加だ。

札幌市北区の新川連合町内会もその一つ。住民から寄付を募って2000年まで3年間かけて整備した「新川さくら並木」(7・5キロ)の一部が初めてコースに組み込まれた。並木を含め5力所で地域住民約670人が紙コップに入れた水を用意する。また、選手を元気づけるため小学生らが沿道で和太鼓を演奏する。

同連合町内会の長島光治会長は「日本有数の桜並木にしよう、みんなで大切に育ててきた。ここで選手が気持ちよく走れるよう、スムーズに活動したい」と意気込んでいる。



コースに組み込まれた新川さくら並木沿いで給水に当たる新川連合町内会の役員ら